

栃木邑から 飛んできた甲石



上村君地区のこの話は、今から千年以上もの古い話から始まります。

平 将門は朝廷にむほんをおこし、下総国（千葉県北部及び茨城県の一部）の父の遺領地に帰りましたが、遺領地をめぐる一族の争がますますひどくなって大きわぎになりました。そして将門は勢力をのばして、武蔵国のお役人たちまで困らせるなどの反乱をおこしたので、武勇にすぐれた藤原秀郷（依 藤太）と平 貞盛の二人の武将は力を合わせて、朝敵将門を討伐しました。（天慶の乱）
武蔵国も下総国も平和になって、秀郷と貞盛の手がらは

人々からほめたたえられました。将門の乱を平定した秀郷は功績をみとめられて、武蔵国と下野国の二國の守に任ぜられ、東谷（羽生）に国府（役所）を開いて政治をとったといわれます。人々をさいなんから守り、やすらかに暮せるようにしてくれた秀郷は、神様のようにあがめられました。

ところがそれから六百年もたったある日のこと、下野国（栃木県）栃木邑から、たたみ一枚ほどもある大きな石が上堤根村（上村君）に飛んできたということで、村は上を下への大きわぎになりました。紫がかったこの石は形が「かぶと」によく似た石です。「もしかしたら秀郷将軍が石になって村を守るために飛んできたんだんべ」と里人たちはこの不思議な石をめぐるワイワイガヤガヤ……結局勇猛な秀郷の化身と信じ「ありがてえ、ありがてえ」「やたらに人の目にふれたら神様にバチがあたる」と地表に少しおすがたを見せて地中に安置しました。

丁度その頃が戦に明け戦に暮れた戦乱の世だったので、秀郷が将門の乱を平定した時のようにと里人たちは甲石をご神体にして信仰しました。

秀郷が愛用した「蓬来矢のよろい」は栃木県の唐沢神社の宝物になっているようですが、上堤根村ではよろいの名

をとって難波矢
持社を建立し、
秀郷を祀り、村
の平和を祈りま
した。

館林城主、松
平左近将監は
（今から二百年
位前）領内を
巡行した折に、
甲石を興味深く
見ていかれたと
いう記録があり
ます。

